

大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所(発行)

〒550-0014 大阪市西区北堀江4-3-2

第39号

大阪市史料調査会(編集)

大阪市立中央図書館内 Tel.06-6539-3333

●平清盛、阿倍野で危機一髪！？

平清盛と平氏一門が発展する一つのきっかけとなったのが、平治元年（1159）に起こった平治の乱です。その三年前に起こった保元の乱の後、実質的に朝廷を牛耳っていた信西入道しんせいに対する反発から藤原信頼・源義朝らは、信西と協力関係にあった平清盛が、一族・郎等とともに熊野参詣に出掛けて京都を留守にしている隙に、クーデターを起こし、信西を討ち取ります。彼らに残された問題は、いずれ熊野から京都に帰ってくるであろう、平清盛の存在でした。

平治の乱の顛末を描いた『平治物語』には、クーデターに成功した信頼らに、義朝の長男義平が、帰京する清盛一行への対抗策を進言する場面があります。義平は悪源太あくげんたの異名を持ち、坂東でおじの源義賢よしかた（木曾義仲の父）を討つなど、非常に猛々しい武士でした。このとき義平は、信頼に自分に軍勢を預けてもらえば、清盛一行の熊野参詣の帰路にあたる阿倍野まで出向き、そこで待ち伏せをして、彼らを討つという作戦を提案します。その詳細は、清盛一行が熊野参詣の帰りで鎧よろいなど着こんでおらず防備も手薄なため、真正面からぶつかり包囲して、あたりの山林に逃げ込んだ者がいても追いかけて討ち取ってみせる、というものでした。熊野参詣路の中で阿倍野が選ばれた理由は、ここが、熊野から北上する清盛一行を見渡せる広大な野原であり、軍勢を展開して合戦を行うのに最適な場所と認識されていたからだと考えられます。

一方、清盛一行も、義平が三千騎の軍勢を率いて、阿倍野で待ち伏せしているという情報に接します。多勢に無勢だと判断した清盛は、一度四国に逃れて軍勢を立て直そうと考えましたが、息子の重盛しげもりや郎等の平家貞らの意見により、京を目指します。その途中で武装した一団に出会い、当初、義平の軍勢かと思われましたが、彼らは急遽清盛のもとに駆け付けた郎等たちで、阿倍野で待ち伏せしている軍勢というのは、彼らのことであったということがわかります。その後、清盛は京都に帰って信頼・義朝の討伐に成功します。

なぜ、義平は阿倍野に現れなかったのでしょうか。それは、藤原信頼が義平に対して、「わざわざ京都から阿倍野まで馬の足を疲れさせるような真似をせずとも、清盛たちを京都の中に引き入れてから討てばよい」と、彼の提案を却下していたからです。しかし、『平治物語』は鎌倉前・中期頃（1190～1246年）に成立したものであるため、義平が実際にこうした作戦を提案したかどうかは、物語上の創作だった可能性が強いと言わざるを得ません。たとえ創作



阿倍野区の北畠公園にある伝北畠頼家の墓

だったとしても、『平治物語』ができた時代には、義平の言葉にもあらわれているように、阿倍野が合戦の場であるという認識が当時の人々の間に浸透していたことは確かでしょう。実際、南北朝時代に阿倍野は、北朝・室町幕府軍と南朝軍との激戦地となります。延元3・建武5年（1338）5月には、南朝の臣北畠顕家が、^{きたばなけあきいえ}高師直率いる幕府軍と阿倍野から堺にかけて激闘を繰り広げ、討ち死にしたことでも知られています。

ともあれ、平治の乱のときに、清盛が熊野参詣に出掛けていたのは事実であり、その帰り道に阿倍野を経由したことも間違いないでしょう。もし、義平が本当に『平治物語』のように清盛一行を襲撃する作戦を提案し、それが実行され、成功していたならば、その後の歴史は阿倍野から大きく変わっていたかもしれません。（生駒孝臣）

こいで ならしげ いしはま じゅんたろう ●小出 檣重と石濱 純太郎

明治20年（1887）10月13日、大阪市南区長堀橋筋1丁目（現在の中央区島之内1丁目）で、小出檣重はその産声を上げました。小出家は膏藥「天水香」で知られた「本家小出積善堂」という老舗の薬屋でした。明治34年（1901）、大阪府立市岡中学校（現在の大阪府立市岡高等学校）に第1期生として入学、同級生の石濱純太郎と運命的な出逢いをします。ちなみに彼の他には、「海ゆかば」の作曲家として知られる^{のぶときよし}信時潔がいました。小出の成績は111名中の92番でしたが、図画だけは群を抜いて



小出檣重が大正6年（1917）1月3日に描いた市岡中学校同級生の似顔絵。前列左端が「Oil Painter」小出檣重、一人おいて石濱純太郎。最後列右から二人目が信時潔（「石濱家文書」より）。

おり、93点とトップでした。石濱純太郎の実家は、^{どしょうまち}道修町の製薬会社「丸石製薬」を営みつつ、学問を修める典型的な町人学者の家であり、^{はくえんしやういん}泊園書院の藤沢家のパトロンもつとめていました。

小出と石濱

の関係は学校卒業後も続きました。石濱家に残された『動産簿』には、小出への資金援助について細かな記載があります。大正10年（1921）8月、この支援を元手として、小出檣重34才、フランスへと旅立っていきました。マルセイユに上陸後、パリ・ベルリンなどを訪れ、翌年にはカーニュで油彩画の制作を開始します。この年の1月16日、石濱家からパリに送金した1万フランが盗まれるアクシデントが起こっています。石濱純太郎に宛てた小出の手紙には、

帰りの船賃やたらぬ金を送ってくれと云ふて置いたが、それはもうやめてくれ。
カンヌへ立つ迄に、日仏銀行の方へ行つて、逆カワセをやつてもらふ事にする。
そして必要なだけ日仏から借りて、それを預金して置く。そして僕が住んでゐる

カンヌの近くか、マルセイユの銀行宛で、必要なだけ送つてもらふ事に相談する。

二千円借りよふと思ふ。

皆さんによろしく

小出 梢重

とあります。小出にとって、フランス留学は必ずしも楽しいものではありませんでしたが、芸術家たちの活動を知る上で、きわめて重要な史料です。

小出はその後、数々の作品を残し、大阪文化に大きな貢献をしました。昭和6年（1931）2月、小出 梢重死去、享年43才。墓所は、小出が若き日アトリエとして用いた小出家の檀那寺である心光寺^{しんこうじ}。一方、石濱純太郎も関西大学文学部教授を歴任し、わが国における西域研究の第一人者として活躍しました。昭和43年（1968）2月、石濱純太郎は80才で死去。墓所は石濱家の出身地である洲本市^{へんしょう}の遍照院^{ひんしょう}。西域文字を記した墓碑銘が今もあります。大阪を代表する芸術家と東洋史家。その二人の奇しき出会いに、大阪のドラマを感じずにはられません。（古川武志）

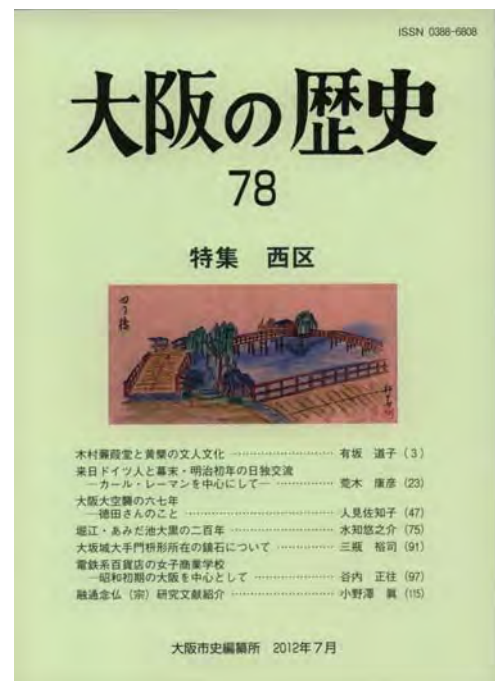
● 新刊のご案内 ●

『大阪の歴史』第78号 特集 西区

第78号は、西区の特集として、西区にゆかりのある町人学者木村兼葭堂、川口居留地を中心に活動したドイツ人商人カール・レーマン、西区で大阪大空襲を経験した徳田勉美^{ますみ}さんのライフヒストリー、あみだ池大黒の歴史に関する論考などを掲載しています。表紙は明治20年頃の四ツ橋です。（1冊700円＋送料160円）

【掲載内容】

- 有坂 道子 「木村兼葭堂と黄檗の文人文化」
荒木 康彦 「来日ドイツ人と幕末・明治初年の日独交流
——カール・レーマンを中心にして——」
人見佐知子 「大阪大空襲の六七年——徳田さんのこと」
水知悠之介 「堀江・あみだ池大黒の二百年」
三瓶 裕司 「大坂城大手門枳形所在の鏡石について」
谷内 正往 「電鉄系百貨店の女子商業学校
——昭和初期の大阪を中心として——」
小野澤 眞 「融通念仏（宗）研究文献紹介」



刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館3階・電話06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店：旭屋書店（天王寺MIO店）、ジュンク堂書店（大阪本店・千日前店・難波店）、ミュージアムショップ文楽（大阪歴史博物館内）

絵はがきでみる昔の大阪（17）

天王寺公園の庭園（大正初年ころ）

天王寺公園は明治42年（1909）12月に成立した、長い歴史のある公園です。明治36年に今宮・天王寺で第五回内国勸業博覧会が開催されましたが、その跡地の東側が天王寺公園となりました（西側は柵外地となっていました）。2枚の絵で画面の奥に見えているのが第五回内国博覧会の時の美術館です。この美術館の館蔵品がどのようになったか、また



後身の市民博物館および現美術館への移行の過程には不明なところも多いようです。なお、現在、天王寺公園にある市立天王寺美術館は、住友家の寄附によって建てられたもので、大正9年（1920）に住友家から敷地譲渡の申し入れがあり、昭和11年（1936）に開館しています。

この2枚の絵はがきですが、和風の庭園と、洋式庭園が写っています。2枚の絵はがきの年代は隔たりがあると思われますが、和風庭園の方が時期的には古いものです。この和風庭園のあったところ



は、第五回内国博覧会のときに、楊柳観音の噴水があった辺りで、噴水を廃止し、水源を利用して、回遊式の庭園を造ったものと考えられます。美術館の右手に寺院のような和風建築が見えていますが、これは博覧会のときに設けられていた喫茶会の建物です。この和風庭園は、美術館の西側、少し土地が下がった辺りです。

これに対し、洋式庭園の方は美術館の東側にあったと考えられます。画面

に温室が見えますが、現在の天王寺公園にも温室があり、同じような場所にありますが（同一かどうかはわかりません）。洋式庭園は、和式とは違って幾何学的に造られており、洋式庭園がまだ珍しかった時代なので、人々の注目を浴びたようです。

（堀田暁生）

【訂正】前号の本欄で、和光寺の放光閣の灯が消えないように保たれているとしましたが、現在は安全な形に改められているということです。お詫びして訂正いたします。

▼大阪市史編纂所では、ホームページを開設しています。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/nannohi/> または **大阪市史** **検索** からご覧ください。

編纂所だより」は、9月と3月の年2回発行しています。次の大阪市の施設等でお配りしています。大阪市の各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、大阪市民サービスコーナー（梅田・難波・天王寺）、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムにておよそ1ヶ月間設置します。大阪市立中央図書館及び各区図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。（24年9月発行）